

第17回静岡コロキウム報告

第17回静岡コロキウムは、静岡県工業技術センター資源環境技術研究会及び静岡県プラスチック技術研究会の協賛を得て、平成10年12月2日(水)午後2時半より静岡県立大学・小講堂で行われた。今回は、事務局本部からの要望でもあり、「いわゆる環境ホルモンの実状」についてお二人の専門の先生をお迎えして、平易な解説を含めた講演を頂いた。講演会は、特に最近関心が高い話題であったことから、多数の参加者を得て盛会裏に終了した。

第一席では、東京理科大学の小野寺祐夫先生により「ダイオキシン、PCBの発生と汚染の現状」について、基礎的内容を含めダイオキシンやPCBの発生と汚染の現状が詳細に解説された。ダイオキシンは、過去のベトナム戦争時に空中散布された枯葉剤に含まれる不純物で、猛毒な発がん性を有する物質である。その後の研究で、ダイオキシンは人間を含む動物の生殖作用を攪乱する恐れがあり、極超微量で世代の存続に重要な影響をもたらす可能性が指摘され、世界中にその存在が強く認識された。このものは身近にあるゴミ焼却場の排煙からも多量に排出され、地球上の至る所で既に汚染が深刻な状況にあると指摘された。他に、ダイオキシンの毒性とその評価、紫外線分解性などについても詳細が報告された。

PCBはこれまでに高電圧変圧器などに大量に使用され、既に地球上には広く拡散している。最も毒性の強いコプラナーPCBは野生生物などに相当量蓄積されており、特に魚介類で高い。それらを摂取している人間にとってはまさに重大な問題である。PCBの残留状況は数年前にピークを過ぎて今はやや減少傾向にある。しかし地球上の自然が元に戻るまでには長い年月と詳細な研究がさらに必要であることが示された。

第二席では、静岡県立大学の中村好志先生により「可塑剤、農薬の排出と残留状態」について講演された。内分泌攪乱作用を示す恐れのある有機物質は現在67品目がリストされている。この中にプラスチック素材や可塑剤及び農薬が含まれる。これらはいずれも人の生活や食材に密接に関わるもので、無関心で見逃すことはできない。農薬の疑わしきものは製造者側の自主的判断で製造販売が中止され、現在ではその残留性に著しい減少効果が見られる。ポリカーボネートやポリ塩化ビニルなどは、関係業界での自粛の動きが進んだ。スチレンオリゴマーは、最新の研究成果から、ホルモン様作用を示す可能性は低いことが報告された。環境ホルモン作用を強く受ける時期は受精してから生殖器官が発生するまでの期間である。この間は特にホルモン様作用を示す物質の被曝を絶対に避けねばならないことを演者は強調された。

当日のコロキウムの参加者は100名を超え、このテーマの関心の高さが感じられた。開演時間の設定が遅かったために講演時間に十分な時間的余裕がもてず、質疑応答が不十分であったことに多少の反省が残った。今回のコロキウムを通じて、参加者には「いわゆる環境ホルモン」に関する正しい認識が十分に深められたものと確信している。

今回の静岡コロキウムを開催するにあたり、貴重なご助言とご協力を下さいました静岡大学工学部松田 智先生、並びに静岡県資源環境技術センター松本 豊氏及び静岡県プラスチック技術研究会曾布川 正氏、さらに懇話会事務局の方々に深く感謝致しますとともに、心より厚くお礼を申し上げます。

(静岡県立大学 野澤靖夫 記)

